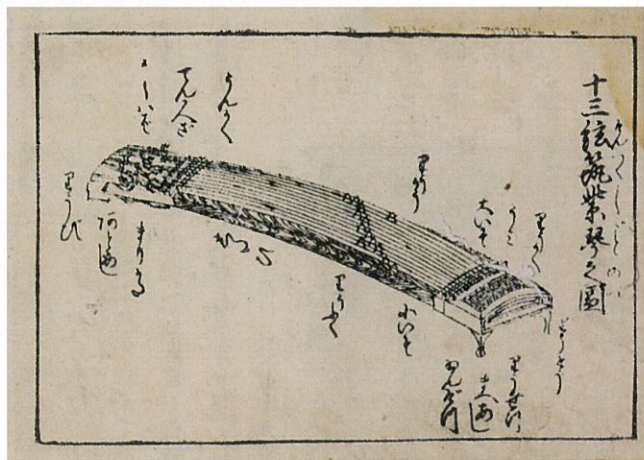
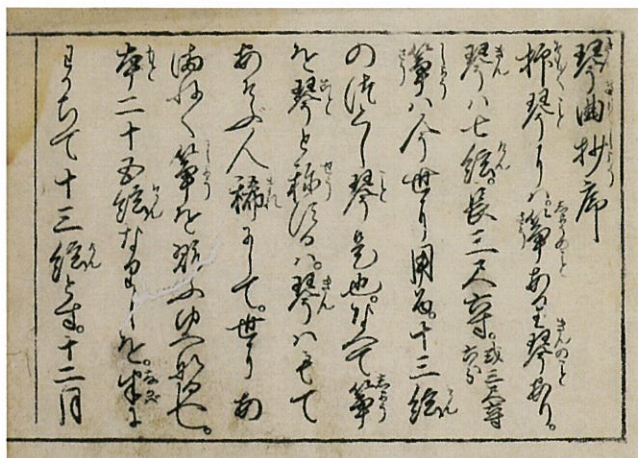


やまとの名品 天理図書館



「十三弦筑紫琴之図」

きん きょく しょう 琴曲抄

元禄7年(1694)刊 横本 2巻2冊
縦11.8cm 横17.5cm

箏は、奈良時代に雅楽の楽器の一つとして伝来し、時代と共に様々な調べを奏でてきました。平安時代、貴族に好まれた箏曲は、宮廷音楽として花開きます。中世になると、寺院でも雅楽が行われるようになり、箏の旋律に歌詞を当てはめた、箏伴奏の歌曲が生まれます。織豊時代に入ると、九州善導寺の僧、賢順が、寺に伝わる雅楽や歌曲の箏譜を整理し、筑紫流箏曲を成立させます。これが後に、近世箏曲の始祖、八橋検校へ伝えられる事になります。

掲出書は、元禄七年（一六九四）、梅村弥右衛門らにより刊行された板本二卷二冊で、箏組

歌の基本となる資料です。箏組歌とは、小編の歌詞を組合わせて一曲にした、弾き歌いの歌曲です。八橋検校作曲の箏組歌十三曲と、他二曲を収録し、歌詞の右に奏法を記譜します。詞章には、『源氏物語』といった古典文学や伝統和歌の摂取が認められ、各歌の後に出典などの注釈を付します。

序文には、「かのつくし樂は、其声最雅にして、俗耳に遠し」とあり、八橋が、筑紫流箏曲の優雅な曲調は、庶民には馴染まないと感じている事が分かります。彼は、陰音階の「平調子」という

調弦法を新たに考案し、演奏技法も改め、庶民に親しみやすいよう、この箏組歌十三曲を完成させるのでした。

本書は、箏組歌本の規範となりました。八橋の活躍によって、貴族階級の音楽であった箏曲は、庶民へも大きく普及し、芸術音楽として確立して行きました。

(天理図書館 末代美保)

